

# 春燈

一月號

1

January 2008



成瀬櫻桃子の句

濃きは母情淡きは父情花菖蒲

句集『素心』昭和五十六年

父母の情を直截に切りとった句であるが、そこには惜しめない愛を終生注いで下さった母への感謝と、幼なくして音信を絶たれた「われを育てざりし父」への果てしない慕情が、「濃き」「淡き」の表現を超えて切々と伝わってくる。〈春霜や墓もへだたり父と母〉の両親を持つ子の悲しみは察して余りあるものがある。季語の花菖蒲があなたも追慕の献花のように感じられる。

尾野奈津子

成瀬櫻桃子の句

笹鳴きのつたなし父と縁うすく

現代俳句文庫19 『成瀬櫻桃子句集』 平成六年

「一九七一年一月二十一日、父逝く」の前書きがある。生後十ヶ月でご両親の離別により、母上と東京に移住女手一つで育てられた。母上のご存命中は、決して逢うことの叶わなかったであろう、瞼の父上との別れに「笹鳴きのつたなし」、切々とその心情を吐露されたのではなからうか。掲句の二句後に「春霜や墓もへだたり父と母」がある。ご両親に対する情の深さが伝わってくる。

林 紀 夫

# 西ヶ原日記

(38)

鈴木榮子

歳暮まだ手許に越年果されず  
暗闇坂と知つて見返る冬うらら  
繁盛の豆源角店冬ぬくし  
鯛焼の追っかけごつこ裏返す  
下戸なれや身の養生と玉子酒

煮凝のぷるぷるをまづ頂きぬ  
モスリンてふ純毛のちゃんちゃんこ  
厄落し大事なものを落しけり  
紙子きて居ても立つても伊左衛門  
切餅のなほ脇腹に刃入れ焼く  
紙問屋粥施行して豎川べり  
寒取りの帰り取的髪みだれ

## 旅衣

今川千鶴子

春祭ブーツ叩いて足拍子（ハンガリアンダンス）  
北欧にいのち咲き満つ花りんご  
薔薇のジャム旅に浪漫なしとせず  
短夜や減らしては足す旅衣  
象の背にマハラジャ気分夏帽子（タイ・チェンマイ）  
八月のファスナーまつすぐ背中割る  
ジャカラランダの花見て足れりロス薄暑  
想ひ出を涼しくたたむ旅衣  
チャドル着てをんな謎めく小春かな  
冬霞カツパドキアは素描の景

## 雪の駒

諸岡孝子

初明り三つの名もてる須川岳（栗駒・大日）  
いで湯てふ別の世にゐてなづな粥  
藤波に一会の膝よす舟下り  
青蔦に息のつまりしフイトンチツド  
山祇の影絵となれる良夜かな  
野天湯の闇の奥なる霧のこゑ  
出羽陸中一望にせる帰燕かな  
冬ざれや顔の殺がれし磨崖仏  
ラッセル車音なく真夜を目覚めをり  
斑雪嶺の駒は四つ足揃へけり

# 当月集

鈴木 榮子選



○ 上野 進

真珠抱き浦曲眠れる十三夜

冷ややかと思ほゆ妻も庭下駄も

蓑虫の蓑の狭さを安堵とす

側々と霧攻め登る堀曲輪

井戸掘りて密かに故山の水盗む

○ 佐々木 新

黄色して山毛櫨上臆の如く立つ

蔦紅葉まとうて山毛櫨の悪女めき

十六夜を待ちて庵に小半時

紀伊熊野崖路の十里石猪垣

鹿垣を残す博多の能古島ののしま

○ 横田 初美

八方を見終へ薄暮の木守柿

神発つやささくれの田に風和ぎて

青空をまぶしむ木瓜の返り花

はかなごと交し茶の花籬かな

立読みの足許にくる時雨かな

○ 植竹 惇江

コスモスのあやなす波に溺れけり

聖なるも魔性の刻も鶏頭燃ゆ

公園の鹿と渡りぬ信号機

絢爛の山車に彫らるる鶴退治(平田市)

金木犀ピオロンの音の流れ来し

○ 内野 俊子

余るほどの黒髪束ね秋の瀟

薬指の味なかなかや大根煮る

秋晴の四角に座敷掃きにけり

新蕎麦や杉箸かをる旧街道

しまひては便りまた読む夜長かな



# 春燈の句

鈴木 榮子選



マラソンやシカゴの残暑極まれり

アメリカ 中藤百々代

木洩れ日に手を取り合ひて落葉踏む

秋風に吹かれてをりぬ車椅子

ハロウィンや闇から闇へ仮装の子

雀色時平仄合はぬ鹿のこゑ

心配の種くはへ去る秋小鳥

銅屋根のくすむ歲月鳥渡る

霧の街記憶の底の煙草の香

雲一朵智恵子の郷の風の色

みかへりの弥陀のまなざし初紅葉

照紅葉中山道へ道分かる

雨しとどホテル窓辺のカウチ冷ゆ

秋澄むや鳥声流す駅ホーム

頂上へリフト近づく秋気かな

千葉 西岡 啓子

東京 向井 芳子

東京 後藤眞由美

十三夜ゆたかなる露地抜けにけり

ささやかにひと日を送る今年酒

永平寺の回廊の艶秋白し

本山のみそ汁の香や鴉の声

障子明け三更の月独りじめ

たどたどしトランペットや月隠る

秋深む牧柵の錆ゆるぎなし

秋土用出荷の牛に飼葉盛る

鰐口の音に輪廻や金木犀

去ることを決めし朝や冬薔薇

椿の実はじけ芭蕉の句碑に飛ぶ

胸内に鷹を飛ばせり伊良湖崎

とんびでも鷹でも嬉し伊良湖崎

冬晴れや錆ついてゐる恋の鍵

神奈川 松山三千江

福島 物江 康平

岡山 小島 正子

# 余言

鈴木 榮子

薬指の味なかなかや大根煮る

内野 俊子

当然、薬指でちよっと味見をした所見。それを薬指に名を借りて、―薬指の味がなかなかよい―と言ったところがこの句の手柄であり言葉のマジックである。だから私もマジックに負けた。このような機知には引掛つてよい。

小指はだめ、中指もだめ、人差指は品がない、やはり薬指が利いている。省略、効果靦面。東京句会に毎月栃木から幾つも電車を乗り換えて出席。てい女、鶴来両氏の群馬

勢に早くおめもじさせたい。中々両先輩に似て味とコクのある句作りをなさる。

手づくりの衣装でハロウィン秋日差 石川 龍士

十月三十一日の万聖節の宵の祭である。南瓜の提灯を点し、趣向をこらした仮面や衣装を子供がつけ、家々を訪問しお菓子を貰ったりする。日本にはまだ定着していないのか。俳句歳時記（ほくめい出版）に例句が載っている。

十年位前、アメリカで訪問した家で日本人学生が拳銃で即座に撃たれるという傷ましい悲劇が起った。日本では余り行われていない。

十三夜麴塵きょじんに染む家路かな 荻原美保子

十三夜の月光に照らされて麴塵の色に染り家路を辿っている。黄緑色は経が青、緯は黄とする天皇の袍の色で禁色の一つであるそうだ。その色を思わせる月光の道を歩み豊かな気持に包まれて終る一日はなんと至福であろうか。またその色の呼び名が多彩だ。やまばといる。あおいる。きくじん。あおしらつるばみ。覚えておけばどこかで出合うかも知れない。（以下略）